

令和 5 年 6 月 15 日現在

機関番号：17201

研究種目：基盤研究(B)（一般）

研究期間：2018～2022

課題番号：18H00677

研究課題名（和文）日本語教育における多読の環境整備と実践、効果測定についての研究

研究課題名（英文）Research on the development of an environment for extensive reading in Japanese language education, its practice, and the measurement of its effectiveness.

研究代表者

吉川 達（YOSHIKAWA, Toru）

佐賀大学・国際交流推進センター・講師

研究者番号：70599985

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費） 9,800,000円

研究成果の概要（和文）：本研究はに日本語学習者の多読を取り上げ、1)多読読み物の拡充、2)効果の検証、3)評価方法の検討、4)実践方法の共有を目的として進めた。1)の成果としては、177の多読読み物を新たに作成するとともに、一般書籍の中から約400冊の多読読み物リストを作成した。2)については、1か月の集中的な多読の実践が、文章理解能力、読むスピード、総合的な日本語能力、文法力等の向上に効果があることを明らかにした。3)については、ポートフォリオ評価などテスト以外の評価方法を提案した。4)については成果や多読についての知見を広く共有するため、ウェブサイトを開設、セミナー等を開催した。

研究成果の学術的意義や社会的意義

これまで日本語教育の多読研究においては、多読が日本語能力の向上にどのように影響するのか、効果を具体的な数値をもって示した研究が少なかった。本研究において、その一端が数値として示されたことは大きな成果である。また、多読のための読み物を未公開分を含め200作近く作成し、一部には朗読の音声を付してウェブサイトで無料で公開できたことは、国内はもとより学習資源が不足しがちな海外の学習者や教師にとって特に有益である。これらに加え、実践例を踏まえた多読の実践方法や理論を広く日本語教育関係者と共有できたことで、多読の理解を促進し、実践を推し進める機会となった。

研究成果の概要（英文）：In this study, 177 reading materials were created for extensive reading by learners of Japanese. In addition, a list of 400 reading materials suitable for extensive reading among general books for native speakers was compiled. Furthermore, the study revealed that one month of intensive extensive reading improves the ability to comprehend texts, reading speed, grammatical ability, Kanji ability and integrated Japanese language proficiency. A new website was established to disseminate these results, and seminars and other events were held to share the results with other Japanese language teachers.

研究分野：日本語教育学

キーワード：日本語教育 多読 読み物作成 読解能力の向上

1. 研究開始当初の背景

本研究を開始した当初は、日本語教育における多読の実践で礎を築いた NPO 多言語多読が活動 10 周年を迎えて間もないときであった。NPO 多言語多読がそれまで培った成果で、日本語学習者向けのレベル別読み物は一通り揃えられ、多読の実践も広まりつつあった。しかし、英語教育に比べると読み物の数は圧倒的に少なく、関心のある一部の教師を除いて広く日本語教育で理解され、実践されているとは言えない状況であった。

日本語教育で行われる読解教育は、精読とテスト対策の読解が主である。仮に教師が多読に関心があったとしても、多読は精読やテスト対策の読解と理念や実践方法、教師の関わり方など全く異なるものであり(図 1 参照)、所属機関の理解なしには実践するのは難しい状況である。多読の実践が広まりにくい状況は英語教育においても同じ課題を抱えるが、その原因を Grabe (2009) は、次のように指摘している。

表 1. 精読と多読の比較

	精読	多読
重視する側面	言語	内容
読む目的	問いに答える/語彙・文法を学ぶ	楽しみや興味、教養のため
読み物	教師指定の全員同じもの/一部	自分が好きなもの/一冊丸ごと
活動の主体	教師	学習者
教師の役割	読解素材選び・解説	学習者の読書状況の把握・助言
読み方	制限	自由
読後の問い	あり	なし
読む速さ	遅い	やや速い
評価方法	質問に正しく答えられたか	定まっていない/行わない
読む量	少ない/課せられた課題分	多い/自由に好きなだけ

- (1) 読解授業や読解のカリキュラムでは、言語のスキル、例えば語彙や文法、翻訳や学習スキルの習得が到達目標となっており多読を通して養われる流暢な読みは到達目標となっていない。
- (2) 多読では多くの読み物と、読む時間が必要となる。
- (3) 読解のカリキュラムでは、文章が正確に理解できる学習者はいずれ自ら流暢な読み手になっていくという仮定のもと、正確に理解することが目標となっている。
- (4) 教師は、読解をどのように教えるべきかについて多角的に捉え直していない、もしくは、学習者からのさまざまな質問に答えられるような読解スキルや言語知識を有していない。
- (5) 多くの教師や学校の責任者は、授業中に教師が教えないこと、学習者がハイスタークなテストへの準備をしないことを快く思っていない。(中略) 教師も責任者も、読むことは宿題でするものだと考えている。

このような状況下で、報告者が精読による読解指導に疑問を抱いていたこともあり、精読やテスト対策の読解教育とは異なるアプローチでの読解教育として多読の可能性を追究し、それを広く日本語教師間で共有する必要があると考え、本研究を行うに至った。

2. 研究の目的

まず前提として多読とはどういうものかということの説明する。多読とは一般的には多く読むことであるが、言語教育現場における多読を実践方法の側面から説明すると「それぞれの学習者がレベルに合った素材を自立的に静かに読むこと (Nation & Waring 2020)」である。読む際には、「やさしいレベルの読み物から読む」「辞書を引かないで読む」「わからないところは飛ばして読む」「進まなくなったら、他の本を読む」という 4 つの指針 (栗野他 2012) に留意しながら読む。これらの実践方法をふまえたうえで、本研究においては多読を実践的な読みの力を促進する教育的アプローチとして捉え、「理解可能な読み物を多量に読むことによって結果的に読解能力をはじめとする言語能力を向上させる教育アプローチ」と定義づける。

多読の特徴を端的に表す言葉に「Learning to read by reading (Smith 2004)」というものがある。泳げるようになるためには泳ぐ練習をするしかないのと同じように、読めるようになるためにたくさん読むのが多読である。

多読の有用性についてはこれまでも数多く言及されており (Day & Bamford 1998、Krashen 2011)、実践に興味を示す日本語教員も多く存在すると推測されるが、日本語教育において多読が活発に行われていなかった。その原因として、本研究では「(1) 多読素材の不足」「(2) 効果の不透明さ」「(3) 評価の難しさ」「(4) 実践方法の理解不足」の 4 点を挙げた。本研究では、英語教育に比べて圧倒的に少ない日本語多読の読み物を充実させ、多読の実践における効果を検証し、実践における現実問題としての評価方法を検討し、それらの知見を広く共有することで日本語教師の多読への理解を促進することを研究目的とした。

3. 研究の方法

上記 4 つの研究課題に取り組むために、それぞれ以下の方法をとった。

(1) 多読読み物の拡充

多読の読み物不足を解消するために、本研究では、読み物の作成と、既存の読み物の収集という 2 つの方法をとった。

(2) 効果の検証

多読が日本語学習者の読解能力にどのような影響を与えるのか、その効果を検証した。多読の効果としては、読解能力の向上をはじめ、語彙力や文法力、読むスピードの向上、さらには聴解

力や作文力、スピーキング能力の向上まで広く指摘されている (Krashen 2011、門田他 2021)。本研究ではそのうち、読解能力として文章を正確に読む力と読むスピード、それに、総合的な日本語能力、文法力、漢字能力について、量的に効果の検証を行った。同時に、言語能力の育成とは別の面で効果があるとされる、読みの達成感や読むことへの肯定的な態度、動機付けの維持など情意的な側面についても学習者が記載した多読への感想を質的に分析することで検証した。

(3) 多読の評価方法の検討

多読の基本理念として、学習者はその読みを読後の問いなどで評価されないことが前提としてある。問いがあることによって、自由な読みが促進されなくなるからである。しかし、大学など教育機関の授業で多読を行う場合は、成績の算出のために学習者を評価する必要がある。この矛盾を解消する方法を授業における多読の実践を通して検討した。

(4) 実践方法の理解の促進

多読の実践が日本語教育において一般的になるためには、教育現場の日本語教師や教育機関の管理者などが多読をよく理解する必要である。上記 (1) から (3) の成果を踏まえ、多読への理解が広く日本語教育界に共有されるように、さまざまな機会と媒体を通して情報を発信することを検討した。

4. 研究成果

(1) 多読読み物の拡充

① 読み物作成

日本語教育における多読読み物は、NPO 多言語多読が作成した『レベル別日本語多読ライブラリー』シリーズ (アスク出版) と『にほんご多読ブックス』シリーズ (大修館書店) が系統的にかつ大規模に展開されたレベル別読み物 (Graded Readers) である。これらのシリーズは初級前半レベルから中級後半レベルの各レベルの学習者がそれぞれのレベルで無理なく読めるよう、語彙、文法が統制されて書かれている。各レベル 30 タイトル程度あり、学習者の読み物選択の幅はある程度担保されているが、内容としては昔話や物語などフィクションが多く、ノンフィクションが少ない。また、これらの学習者向けの読み物と、母語話者向けの一般書籍との間にはギャップがある。既存のシリーズでは足りないこれらの部分を埋めるために、本研究では「現代社会再考」「日本語ちょっとストーリーズ」という 2 つのカテゴリーを設け、主に大学の留学生を読み手として想定し、協力者とともにそれぞれカテゴリーの読み物を集中的に作成した。

「現代社会再考」は、現代社会におけるさまざまな問題について著者が関心のある話題を取り上げて書いた読み物群で、一つのテーマにつき 4 つの作品からなる。著者は、本取り組みに賛同し、協力をしてくださった佐々木瑞枝氏 (武蔵野大学名誉教授)、西口光一氏 (大阪大学)、奥野由紀子氏 (東京都立大学)、松田真紀子氏 (金沢大学)、門倉正美氏 (横浜国立大学名誉教授、研究協力者)、佐々木良造氏 (静岡大学、共同研究者)、吉川達 (佐賀大学、研究代表者) (所属は、いずれも当時) の 7 名である。これにより、一つのテーマについての異なる 4 つの視点から書かれた読み物という、これまでの多読読み物にはない種類の読み物が完成した。また、これらの読み物の作成を通して、テーマ設定から使用する語彙の選択、分量、想定される読み手、書き手の著者性、イラストや写真のような視覚素材の使い方、著作権のことなど、ゼロから多読読み物を作成する際に留意すべきポイントが明らかになった。

「現代社会再考」で得た知見を踏まえ、次に「日本語ちょっとストーリーズ」という、気軽に読める読み物群の作成を行った。「日本語ちょっとストーリーズ」は、最近話題になっている人物や事件、事象の話、筆者の体験談などを題材とし、学習者向けの読み物として仕立てた。作成に携わったのは、本取り組みに賛同し、協力をしてくださった佐藤淳子氏 (北海道大学非常勤講師)、二口和紀子氏 (開智国際大学)、森勇樹氏 (在日米国大使館)、門倉正美氏、佐々木良造氏、吉川達である。

これら 2 つの取り組みによって、レベル別読み物と一般書籍を橋渡しするような 100 作近い多読読み物が作成された。

作成した作品は、日本語書籍が入手しにくい海外の日本語学習者や日本語教師でも利用できるように、紙媒体ではなく、電子媒体での公開を前提とした。さらに、使用の利便性を重視し、著作権に関する許諾を省略、簡略化できるような作品にはクリエイティブ・コモンズ・ライセンスを付した。

これらの作品を無償で公開するために、多読に関する情報を総合的に発信するウェブサイト「たどくのひろば (<https://tadoku.info>)」を開設した。

ウェブサイトの開設後、上記二つの取り組みに続き、外国人児童生徒を読者に想定した年少者向け読み物の作成や、一般の母語話者や日本語学習者のエッセイを募集した「私のちょっと〇〇な話」といった取り組み、一般からの読み物の作成、提供の申し出等を含め、本事業の終

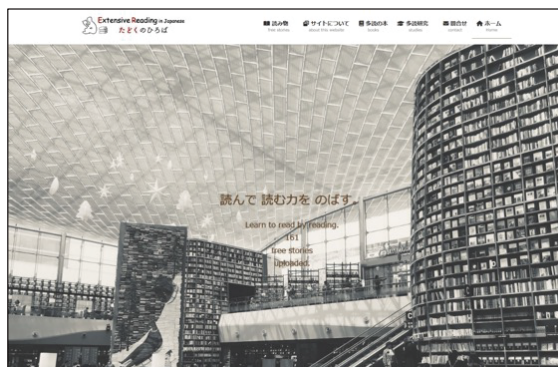


図1 たどくのひろばトップページ

了する 2023 年 3 月末時点で 177 作の多読読み物をウェブサイト公開した。

②既存の読み物の収集

多読を行う際には、学習者の日本語レベルに合わせて読めるレベル別読み物を使用することが基本であるが、母語話者向けに書かれた一般書籍の中にも多読に向くものがある。そのような書籍をリスト化し、一部を多読の実践で使用して学習者の反応を確認した。

一般書籍で多読に向く読み物としては、絵本がその代表である。ただし、絵本は幼児向けに書かれたものが多く、本研究で対象としている留学生など成人日本語学習者に対して使用するには、内容を見て選別する必要がある。また、絵が中心とはいえ、そこに書かれている文も理解する必要があり、学習者が無理なく理解できる日本語で書かれたものを選ばなければならない。これらの視点から絵本を分析し、条件を満たす物として 135 作の絵本を選出した。

絵本以外の書籍としては、年少者向け科学読み物の月刊誌である「かがくのとも」「たくさんのふしぎ」（いずれも福音館書店）のシリーズや、小中高校生向けに書かれたヤングアダルト文学（YA 文学）も多読の読み物としてはよい。YA 文学の中で、特に、学校教育で行われる朝の 10 分間読書に向けて書かれた読み切りの読み物集「10 分で読める」シリーズや中高生に人気の読み切り小説「5 分後に意外な結末」シリーズ（いずれも Gakken）が日本語学習者の多読の実践において留学生にも高評価であった。このような母語話者向けの一般書籍のうち、比較的日本語が平易に書かれている、漢字にルビが振られている、学習者が読み切れる分量である、学習者が興味を持ちそうな内容である等の基準から日本語学習者の多読に向く書籍を約 300 冊抽出し、リスト化した。

絵本も含め、これらの書籍の一覧を見やすい形にして今後ウェブサイト「たどくのひろば」で公開する予定である。

(2) 多読の効果の検証

①読解能力の向上について

本研究では、多読の効果を明らかにするため、47 名の日本語学習者を対象に 10 時間の多読を実践し、総合的な日本語能力、文法運用能力、漢字運用能力、読むスピード、読解能力においてどのような変化があるか検証した。

調査協力者は、大学に在籍する日本語レベルが初級前半から上級までの学部留学生、交換留学生、大学院生、研究生計 47 名であった。調査は、事前テスト、10 時間の多読実践、事後テストを 1 か月間で行い、事前テストと事後テストの結果を比較した。テストは、総合的な日本語能力、文法運用能力、漢字運用能力の測定に筑波大学が運営する「筑波大学テスト集 (TBJ)」の SPOT90、文法 90、漢字 SPOT50 を、読むスピードと読解能力の測定に、日本語能力試験の過去問題を利用して作成したテストを使用した。作成した読解テストは、日本語能力試験の平成 14 から 21 年度の 2 級から 4 級の読解問題のうち、識別力が 0.3 以上の問題を抽出し、同じ問題数、同程度の困難度となるように異なる 2 版を構成したものである。1 回分の構成は全 20 文章・49 問で、4 級、3 級、2 級の順に問題を配置した。読解の試験時間は 30 分で、解いた問題数と読んだ文章数を読むスピードの指標とし、解いた問題数における正答率を読解能力の指標とした。多読の実践は NPO 多言語多読監修のレベル別多読読み物を使用した教室内多読で、多読についての基本的な実践方法を学習者に教授したのち、3 週間の期間中に 1 日 1 時間、都合のよい 10 日間教室に来て多読するという形式で行った。

事前、事後テストの結果の平均値を対応のある t 検定で比較したところ、以下のような結果となった。

表 2. 事前、事後テストの結果比較

	事前		事後		t 値	自由度	有意確率 (両側)	効果量
	平均値	標準偏差	平均値	標準偏差				
総合日本語力 : SPOT90	58.8	15.1	63.4	15.5	-5.273	46	$p < .0001$	0.303
文法運用力 : 文法90	50.2	18.6	53.7	17.1	-4.719	46	$p < .0001$	0.193
漢字運用力 : 漢字SPOT50	26.5	15.2	28.4	14.7	-3.045	46	$p = .004$	0.125
読むスピード : 到達文章数	12.3	4.0	14.7	4.0	-11.217	46	$p < .0001$	0.596
読解能力 : 正答率	0.821	0.220	0.811	0.152	0.358	46	$p = .722$	-

総合的な日本語能力、文法能力、漢字運用力、読むスピードいずれも多読後の成績が有意に向上した。読解能力としての読解テストの正答率は、事前事後で有意な差はないが、これは、学習者が読解テストにおいて読むスピードが向上してより多くの読解問題を解いたにも関わらず、正答率が下がっていないことを示している。正答率が 0.8 を越えていることからみても、学習者が文章を正確に読みつつ、読むスピードが速くなったと判断できる。具体的に、到達した問題数を見てみると、どのレベルの学習者も、日本語能力試験大問 1 問分以上多く解ける程度に読むスピードが速くなっていた。

日本語教育においては、その効果が量的に示されることが少なかったが、本研究でその一端が明らかになったことは大きな成果である。

②情意的側面への効果

多読によって読みに対する意識がどのように変化したか、学習者の感想を取り上げることで分析した。報告者は、本研究を開始した2018年度から多読の実践を継続している。その際に、学習者から多読に対する所感を記述式で収集している。その記述をまとめると、「読むスピードが上がった」「読解能力が上がった」といった記述が多く、事前、事後テストの比較で明らかになった効果を実感として持っていることがわかる。また、日本語特有の効果として「縦書きの文章に慣れた」という記述も多い。世界的に見ても縦書きで文章を書く国は少なく、縦書きの文章を読むことは、学習者が慣れ親しんだ横書きの文章を読む場合に比べて認知的な負荷が大きいと推測される。それを多読によって多量に読むことで慣れるというのは、他の言語にはみられない効果であろう。このような日本語能力の向上や認知処理への効果とは別に、「本を読むおもしろさがわかった」「達成感があつた」「読むことが楽しくなった」のような、読むことに対する記述も多く見られた。多読の一つの目的に、よき読み手を育てるということがある。読みに対する肯定感の上昇のような情意的な効果は数値には表れにくいものであるが、学習者を自立したよき読み手に導くためにも、多読を実践する上で決して無視できない効果である。

(3) 多読の評価方法について

多読は読後の問いが課されないことが前提としてあり、評価を必要とする教育機関での実践では矛盾が生じる。その矛盾を解消するために、報告者が実践を通して検討した評価方法は、テストのような数値で評価するのではなく、ポートフォリオなどで過程を評価すること、ブックトークなどの読みに関わる活動を評価すること、読んだ冊数を評価することなどである。これらの方法を、次の(4)で挙げるセミナー等で提示してきたが、確たる結論は出ず、評価自体を行わない方法がないのかを含めて今後も継続して検討する必要がある課題である。

(4) 多読への理解を広めることについて

これまで作成した読み物、実践例、実践方法、理論的背景、効果など本研究を通して得た知見や成果物については、「たどくのひろば」のウェブサイトで公開し、またセミナー等を開催することで共有してきた。「現代社会再考」の作品群の作成終了後、2020年8月にオンラインで公開パネルディスカッションを開催し、国内外から249名の参加があった。また、「日本語ちよとストーリーズ」の作成終了後、本研究の総括を含めて開催した2023年1月のセミナーには103名の参加があった。さらに、日本語教育学会で行われる「交流ひろば」に、2018年度(九州・沖縄支部集会)、2020年度(北海道支部集会、東北支部集会、関西支部集会、中国支部集会、秋季大会)、2021年度(秋季大会)、2022年度(秋季大会)出展し、各回ともに100名以上の参加者と情報交換を行った。コロナ禍の影響もあり、これらはオンラインでの交流となったが、オンラインであるために海外からの参加者も多く、国内外を問わず広く多読についての成果を共有できた。

また、作成した読み物を広く周知するために作品の一部を集めた冊子を作成して無料で配付した。当初の計画では2022年度に対面開催で行われる予定だった日本語教育学会秋季大会にて配布する予定だったが、急遽オンライン開催となったため、ウェブサイトやセミナー等を通して配付を周知するよう変更したが、随時配付希望の連絡が来ており、順調に配付が進んでいる。



図2 「たどくのひろば」冊子表紙

<参考文献>

- 栗野真紀子・川本かず子・松田緑(2012)『日本語教師のための多読授業入門』アスク出版
門田修平・高瀬敦子・川崎真理子(2021)『英語リーディングの認知科学 文字学習と多読の効果をさぐる』くろしお出版
- Day, R. R. and Bamford, J. (1998). *Extensive Reading in the Second Language Classroom*. New York: Cambridge University Press.
- Grabe, W. (2009). *Reading in a Second Language: Moving from Theory to Practice*. New York: Cambridge University Press.
- Krashen, S. D. (2011). *Free Voluntary reading*. Santa Barbara, CA: Libraries Unlimited.
- Nation, I.S.P. and Waring, R. (2020). *Teaching Extensive Reading in Another Language*. New York: Routledge.
- Smith, F. (2004). *Understanding Reading (6th ed.)*. Mahwah, NJ: Lawrence Erlbaum Associates.

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計5件（うち査読付論文 1件/うち国際共著 2件/うちオープンアクセス 1件）

1. 著者名 吉川達	4. 巻 42-3
2. 論文標題 日本語教育における多読 - 読むことによって読む力を育てる -	5. 発行年 2023年
3. 雑誌名 日本語学2023年9月号秋号	6. 最初と最後の頁 -
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -
1. 著者名 ウィパーウィー・シースラバーノン, 佐々木良造	4. 巻 4
2. 論文標題 プレゼンテーション授業改善のための取り組み インプットとしての多読学習材活用の提案	5. 発行年 2023年
3. 雑誌名 タイ日研究ネットワークThailand研究論集	6. 最初と最後の頁 1-10
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 該当する
1. 著者名 吉川達・二口和紀子	4. 巻 9
2. 論文標題 回帰直線を用いた2つのリーディングスパンテスト間の得点の等化	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 佐賀大学全学教育機構紀要	6. 最初と最後の頁 121-136
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -
1. 著者名 佐々木良造・高橋千代枝	4. 巻 3
2. 論文標題 アジアブリッジプログラムにおける日本語教育プログラムの総合的な検討：2020年度初学期教育の日本語科目を対象として	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 静岡大学国際連携推進機構紀要	6. 最初と最後の頁 1-13
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） 10.14945/00028190	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 佐々木良造・シースラパーノン ウィパーウィー・門倉正美・吉川達	4. 巻 1
2. 論文標題 字なし絵本から多読につなげる図書館活動 - タイ・バンコクの幼小中高一貫校における取り組み -	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 タイ日研究ネットワークThailand研究論集	6. 最初と最後の頁 90,102
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 該当する

〔学会発表〕 計10件 (うち招待講演 2件 / うち国際学会 3件)

1. 発表者名 門倉正美
2. 発表標題 ウェブ学習材を活かして、多読を促そう！
3. 学会等名 国際エジプト日本学会基調講演 (招待講演) (国際学会)
4. 発表年 2023年

1. 発表者名 吉川達
2. 発表標題 今日から始める日本語多読 - 多読の基礎知識から教室での実践まで -
3. 学会等名 JF日本語ネットワーク特別プログラム 日本語教育セミナー (招待講演) (国際学会)
4. 発表年 2022年

1. 発表者名 佐々木良造
2. 発表標題 教室内多読の読書記録に基づく読み速度調査
3. 学会等名 日本語教育研究方法会
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 Wipawee Srisurapanon・佐々木良造
2. 発表標題 タイ国内でのオンライン授業における多読の実践報告
3. 学会等名 日本語教育研究方法会
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 逢坂里恵・佐々木良造
2. 発表標題 学部留学生を対象とした新書通読課題の困難点
3. 学会等名 日本語教育研究方法会誌
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 吉川達
2. 発表標題 多読読み物に対する日本語学習者の評価 日本語レベルの低い読み物はつまらないのか
3. 学会等名 2020年度日本語教育学会秋季大会
4. 発表年 2020年

1. 発表者名 佐々木良造
2. 発表標題 理系大学院留学生対象ハイブリッド型初級日本語授業の試案
3. 学会等名 日本語教育方法研究会
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 吉川達、門倉正美、佐々木良造
2. 発表標題 日本語教育における多読の実践と課題
3. 学会等名 韓国日語教育学会2019年度第35回国際学術大会（国際学会）
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 吉川達
2. 発表標題 「アカデミック・ジャパニーズ」の授業において50名の学生に多読を実践することは可能か？
3. 学会等名 第50回アカデミック・ジャパニーズ・グループ定例研究会
4. 発表年 2020年

1. 発表者名 佐々木良造
2. 発表標題 大学図書館内の一室を利用した多読の実践報告
3. 学会等名 第52回日本語教育方法研究会
4. 発表年 2019年

〔図書〕 計0件

〔産業財産権〕

〔その他〕

<p>たどくのひろば https://tadoku.info 新書を読もう https://shinsho30.wordpress.com/</p>
--

6. 研究組織

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
研究 分担者	佐々木 良造 (SASAKI Ryozo) (50609956)	静岡大学・国際連携推進機構・特任准教授 (13801)	

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
研究 協力者	門倉 正美 (KADOKURA Masami)		
研究 協力者	ムスタファ ゴライダ (MUSTAFA Zoraida)	University Science Islam Malaysia	

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8. 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関		
マレーシア	University Science Islam Malaysia		
タイ	Siam University	Roong Aroon School	
その他の国・地域	The Chinese University of Hong Kong		